

荒神谷資料館(仮称)建設に伴う
西谷遺跡発掘調査報告書

2004年3月

斐川町教育委員会

こうじんだに
荒神谷資料館(仮称)建設に伴う
さいだに
西谷遺跡発掘調査報告書



島根県斐川町の位置

2004年3月

ひかわちょう
斐川町教育委員会

序

斐川町神庭の荒神谷遺跡から358本もの大量の銅剣が発見されて今年で20年という節目の年になりました。以来、出土土地周辺約1.3haが国の史跡（昭和62年）に、出土品が括して国宝（平成10年）に指定されるなど荒神谷遺跡の価値はますます高まり評価されてきました。

また、町では遺跡の保存と町民の憩いの場となるよう出土土地の復元整備（平成元年）や、荒神谷史跡公園（平成7年）の整備を進めてまいりました。

さらに、町ではこの貴重な宝を真近で見ていただくために遺跡近くに長い間、町民の待望であった資料館を建設し、本物の青銅器を展示する準備を進めているところです。古代出雲文化の原点である荒神谷遺跡を未来へ継承し、文化観光の拠点となるような資料館にしていく考えであります。

本報告書は、この資料館建設予定地に所在する西谷遺跡についての調査成果をまとめたものです。本書が多くの方の目にふれ、郷土の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心が高まる一助となれば幸いです。

最後に、本書を発刊するにあたり、ご指導、ご協力を賜りました皆様に厚くお礼申し上げます。

平成16（2004）年3月

斐川町教育委員会
教育長 村上家次

例　　言

1. 本書は、斐川町教育委員会が平成15年度に実施した荒神谷資料館（仮称）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2. 発掘調査を実施した遺跡は次のとおりである。

西谷遺跡　島根県簸川郡斐川町大字神庭873番地8外

3. 調査組織及び期間は次のとおりである。

〔組織〕

調査指導　島根県教育委員会

調査主体　斐川町教育委員会

事務局　陰山 畏（文化財課長）、原 買二（文化財課主事）

調査員　穴道年弘（文化財課係長）

調査補助員　大田晴美（文化財課臨時職員）

〔期間〕

第1次調査 平成15年 6月 9日～同年 7月 23日

第2次調査 平成15年 11月 21日～同年 12月 10日

4. 現地調査及び資料整理に際しては、下記の方々にご助言、ご協力をいただいた。(順不同・敬称略)

佐藤 信（東京大学）、内田律雄（島根県埋蔵文化財調査センター）、平石 充（島根県古代文化センター）、江角 健（斐川町教育委員会文化財課）、佐々木歩美（同）、阿部賀治（同）

5. 発掘調査にあたっては、次の方々に従事していただいた。(順不同・敬称略)

池淵一夫、岡田 實、小松原茂、昌子守藏、昌子安正、高木善郎、福島元義、福間立身、遠藤繁雄、勝田光久、金山次夫、黒田一三子、佐藤倭和子、昌子滝市、高橋義政、建部陽子、梅 清、原 清視、中間盛夫、中村裕之

6. 本書で使用した挿図の方位は磁北であり、レベル高は海拔である。

7. 第2図は国土交通省国土地理院発行のものを使用した。また、第1図の調査地配置図は（株）大陸設計に作成業務を委託した。

8. 本書の執筆・遺物実測は穴道が行ない、大田が補助した。トレース等は大田が行なった。

9. 本書に報告した出土遺物、実測図、写真等は、斐川町教育委員会で保管している。

目 次

序

例 言

目 次

挿図目次・挿表目次・写真図版目次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 位置と環境	3
第3章 調査の結果	5
第1節 第1次調査の概要	5
1. 第1グリッド	6
2. 第2グリッド	7
3. 第3グリッド	7
4. 第4グリッド	8
第2節 第2次調査の概要	9
1. 調査の概要	9
2. 出土遺物	11
第4章 まとめ	12

挿 図 目 次

第1図 西谷遺跡及び西谷Ⅱ遺跡調査地配置図	2
第2図 西谷遺跡と周辺の主な遺跡	4
第3図 調査区配置図	5
第4図 第1次調査区北壁断面図	6
第5図 第2次調査区平面図	8
第6図 第2次調査区北壁・西壁断面図	9
第7図 第2次調査区出土遺物実測図1	10
第8図 第2次調査区出土遺物実測図2	11
第9図 西谷遺跡と荒神谷遺跡及び西谷Ⅱ遺跡の位置	13

挿 表 目 次

表1 西谷遺跡及び西谷Ⅱ遺跡既往の調査地一覧	1
表2 遺物観察表	13

写 真 図 版 目 次

墨書き器（赤外写真）

図版1上	調査前全景（第1次調査時） 南より
図版1下	調査前全景（第2次調査時） 南より
図版2上	第1次調査第1グリッド完掘状況 南より
図版2中	第1次調査第1グリッド北壁
図版2下	第1次調査第1グリッド出土遺物
図版3上	第1次調査第2グリッド完掘状況 南より
図版3中	第1次調査第2グリッド北壁
図版3下	第1次調査第2グリッド出土遺物
図版4上	第1次調査第3グリッド完掘状況 南より
図版4中	第1次調査第3グリッド北壁
図版4下	第1次調査第3グリッド出土遺物
図版5上	第1次調査第4グリッド完掘状況 南より
図版5中	第1次調査第4グリッド北壁
図版5下	第1次調査第4グリッド出土遺物
図版6上左	第2次調査完掘状況 東より
図版6上右	第2次調査出土状況
図版6下	第2次調査北壁
図版7	第2次調査出土遺物
図版8	第2次調査墨書き器

第1章 調査に至る経緯

待望の荒神谷資料館（仮称）を単独で建設することが決定した平成13年10月以降、斐川町では資料館建設のための「検討委員会」や「準備委員会」を設置し、基本計画及び基本設計を策定してきた。これにより資料館の建設場所は、旧「出雲の原郷館」（荒神谷遺跡の町営無料休憩施設）周辺に約1,200m²の用地で建設することとなった。

これを受け斐川町教育委員会は、建設予定地には昭和58年に篠川南地区広域農道建設に伴う分布調査やその後の試掘調査などで西谷遺跡の存在が明らかであったので、文化財保護法に基づく遺跡の発掘調査が必要であると判断した。調査に先立って、これまで西谷遺跡及び隣接する西谷Ⅱ遺跡を含め過去に行われた5回の調査場所を整理したので、第1図に調査地、表1に概要を示す。

今回、調査を行なうにあたって念頭におく必要があるのは、昭和63年に合併浄化槽設置に伴う調査で弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての土器を含む溝状遺構が検出された場所に隣接していることである。

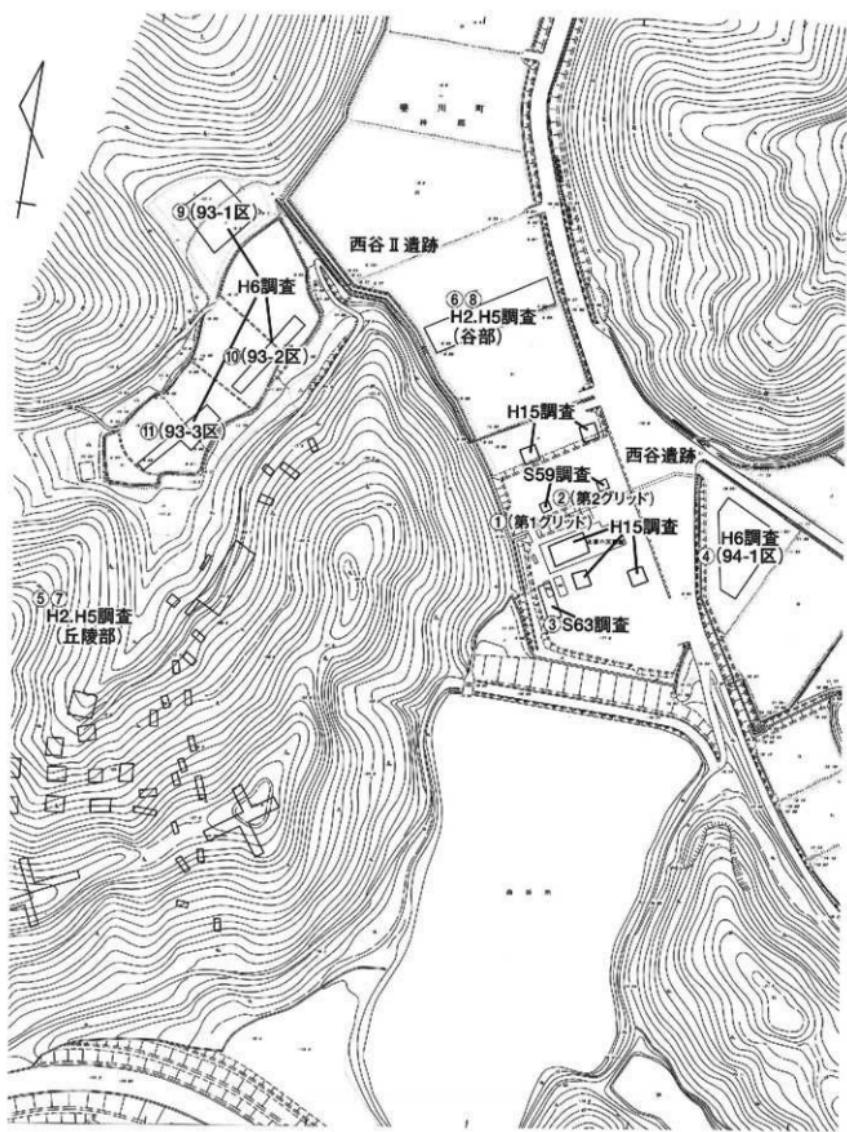
調査は第1段階として平成15年6月9日から7月23日にかけて、遺跡の広がりを把握するために現造成地（旧水田部分）に4箇所の試掘グリッド（第1次調査）を設けた。その結果、第3グリッド及び第4グリッドにおいて遺物包含層が認められた。これを受けて第2段階として同年11月21日から12月10日にかけて、旧「出雲の原郷館」跡地の調査（第2次調査）を行い遺跡の概要を把握することにつとめた。

表1 西谷遺跡及び西谷Ⅱ遺跡既往の調査地一覧

遺跡名	調査年度	調査契機	調査地	遺 構	遺物(時期)	備考	挿図番号
西谷遺跡	昭和59年度	広域農道建設	第1グリッド		須恵器(古墳後期～奈良) 土師器		第1図①
					土師器		第1図②
	昭和63年度	合併浄化槽設置	全区	溝状遺構	弥生土器(弥生後期後半) 古式土師器(古墳前期) 須恵器(古墳後期～奈良)		第1図③
	平成6年度	史跡公園整備	94-1区	水田畦畔、牛蹄跡	須恵器(奈良～平安) 上師器、石鏡	プラント・オーパール	第1図④
西谷Ⅱ遺跡	平成2年度	広域農道収付	谷部	溝状遺構	弥生土器		第1図⑤
			丘陵部	ピット、土坑	須恵器、土師器		第1図⑥
	平成5年度	広域農道収付	谷部	溝状遺構、杭跡、ピット	弥生土器(弥生中期～後期)	プラント・オーパール	第1図⑦
			丘陵部	窓穴柱組、ピット、土坑	須恵器(古墳後期～奈良)		第1図⑧
	平成6年度	史跡公園整備	93-1区	溝状遺構、ピット	須恵器(古墳後期以降)、 土師器 陶磁器、上鍵、石鏡、砥石		第1図⑨
			93-2区	土坑状遺構	須恵器、土師器、鉄滓	プラント・オーパール	第1図⑩
			93-3区		須恵器、土師器	プラント・オーパール	第1図⑪

参考文献

- 「西谷遺跡試掘調査の結果について」 岐阜県教育委員会 1986
「西谷遺跡緊急発掘調査報告書」 斐川町教育委員会 1998
「尾田瀬II・西谷II・西谷遺跡発掘調査報告書」 斐川町教育委員会 1999



第1図 西谷遺跡及び西谷Ⅱ遺跡調査地配置図 (○内数字は表1の番号に対応する)

第2章 位置と環境

西谷（さいだに）遺跡は出雲平野の南部、斐川町神庭の低丘陵にはさまれた谷奥に所在する遺跡である。遺跡の周囲は標高35m前後の丘陵や谷水田、南側には西谷池、さらに東側約200mのところには昭和59、60年に大量の青銅器が出土して全国的に有名になった国指定史跡荒神谷遺跡が存在している。

遺跡が営まれた頃の平野は、入海（古宍道湖）が広がっており、人々の生活はもっぱら南部の丘陵地や谷あいであったと考えられる。

斐川町内では昭和50年代中頃から数々の開発に伴う発掘調査が増加し、現在遺跡の数は240箇所以上に及んでいる⁽¹⁾。以下、時代ごとに主要な遺跡を概観してみる。

旧石器・縄文時代

旧石器時代の遺跡は町内では未発見であるが、大黒山（標高315m）の東麓にあたる宍道町首谷から旧石器の玉髓質錐形細石核が表採された。縄文時代の遺跡としては、結遺跡F地区から早期末～前期初頭、上ヶ谷遺跡から中期末、後谷遺跡から後晩期の土器、新田畠I遺跡からは黒曜石のチップが大量に出土し、標高の高い丘陵や谷あいを生活の場所にしていたことがわかる。

弥生時代

縄文時代から弥生時代中頃にかけて継続的に営まれている後谷遺跡は、仏経山（標高366m）の北西麓に位置し、この地域の拠点集落的な位置を占めている。弥生集落は中期中頃から次第に増え、宮谷遺跡からは表採ではあるが大量の土器類の中に塙町式土器が含まれていることから、山陽との交流を想定することができる。

後期末から古墳時代初期にかけては、今回調査を実施した西谷遺跡や斐伊川鉄橋遺跡がみられ、谷あいや沖積平野からの発見となった。弥生びとの生活空間の拡大や他地域との交流を見て取ることができる。

古墳時代

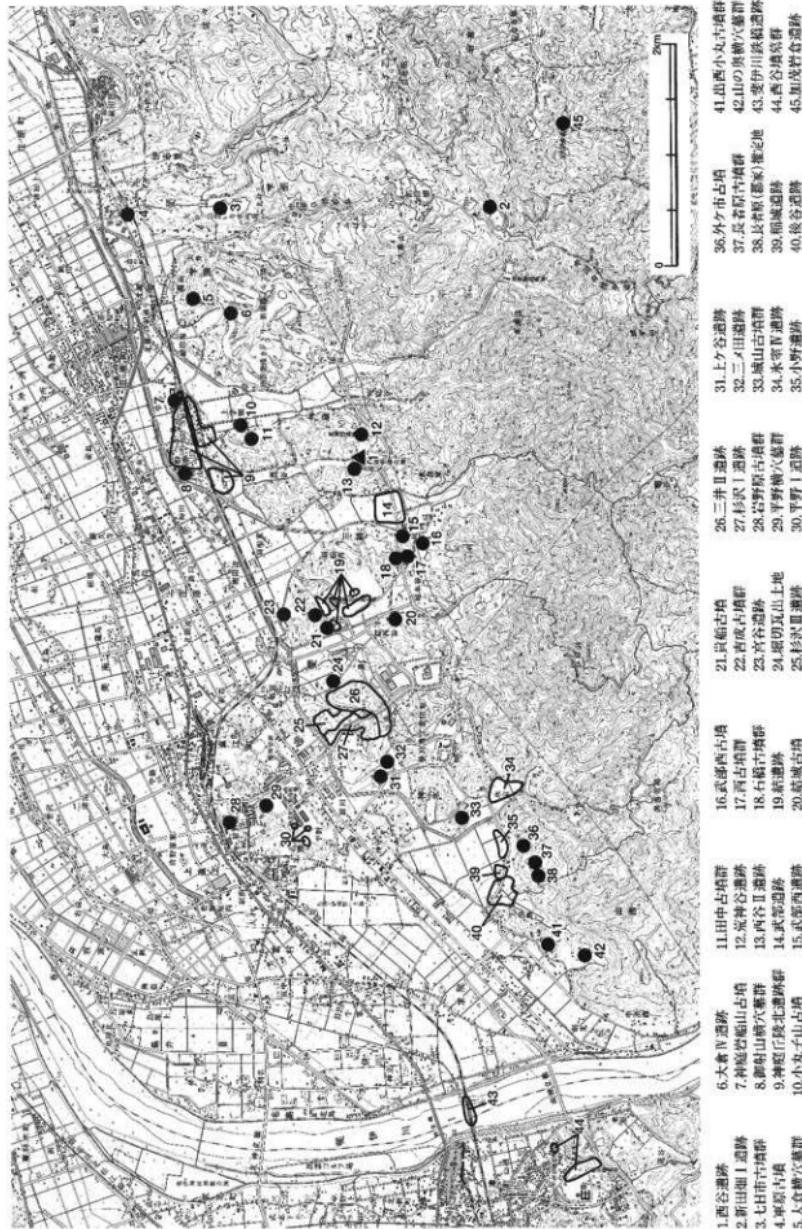
前期の古墳は今のところ確認されていないが、中期になると神庭岩船山古墳、軍原古墳、小丸子山古墳の大型古墳が築かれるようになり、この地域の首長墳の系譜を窺い知ることができる。一方、このころ結古墳群や石櫃古墳群など墳丘の低い小規模な古墳群も丘陵上に築かれ、族長クラスの古墳であったろうと思われる。

丘陵斜面では平野横穴墓群、大倉横穴墓群、山の奥横穴墓群など20基以下の横穴墓群が数群にわかつて築かれている。

奈良・平安時代

大きな礎石と大量の炭化米が出土した後谷遺跡は、出雲郡家の正倉跡と推定されている。隣接する稻城遺跡や小野遺跡からは建物遺構や官衙関連遺物が出土し、郡家の関連施設になる可能性がある。

小野遺跡、稻城遺跡、堀切瓦出土地からは奈良前期、天寺平廐寺からは奈良後期から平安前期の瓦類が多数出土し、この地域の仏教導入期の様相を垣間見ることができる。

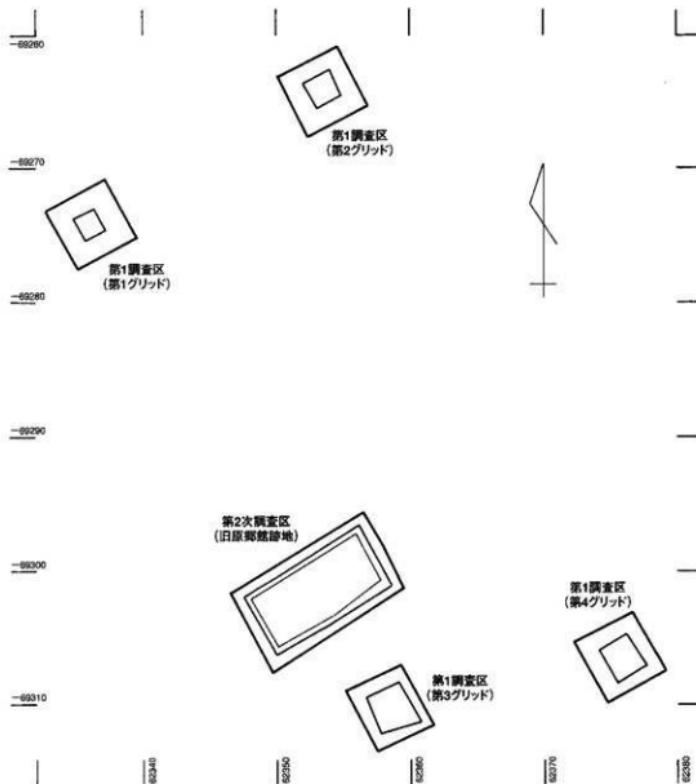


第2図 西谷遺跡と周辺の主な遺跡

第3章 調査の結果

第1節 第1次調査の概要

第1次調査区は荒神谷史跡公園博物館ゾーンの仮整備として駐車場など多目的に使用されている場所で、現地表面には10cm前後の厚さでバラスが敷き詰めてある。調査区は試掘グリッド4箇所で、旧「出雲の原郷館」(以下、旧原郷館という)跡地の北側2箇所、南側2箇所にグリッドを設定した。いずれのグリッドも $5 \times 5\text{m}$ の正方形の調査区で、可能な限り調査を行なったが、壁面が崩壊するほど軟弱な地盤であった。



第3図 調査区配置図

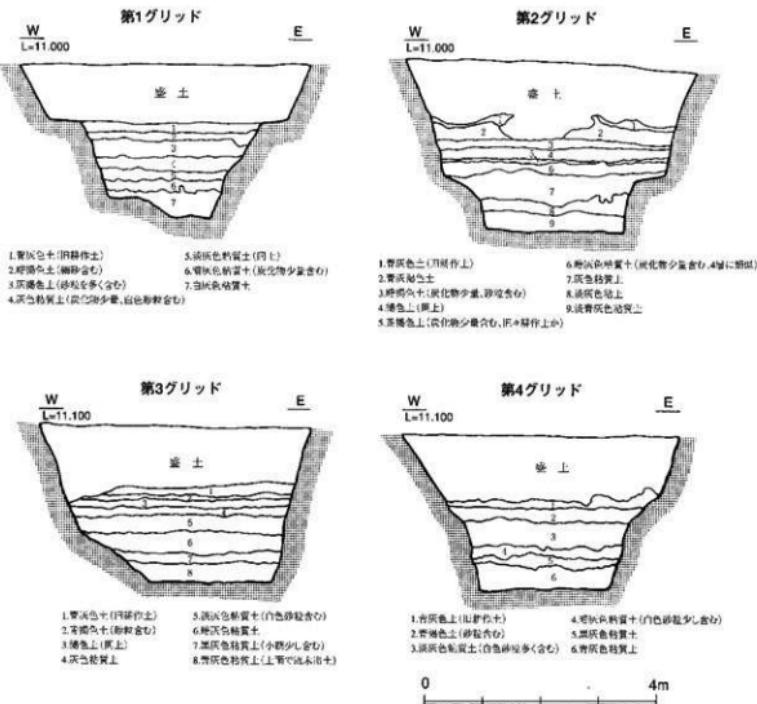
1. 第1グリッド

II原郷館の北側 26 m の位置にグリッドを設定した。バラス層下には史跡公園整備時に盛上した上砂が約 1 m の厚さで堆積している。その下は深さ 2.6 m まで掘り下がることができた。

1 層は層厚 15 cm の青灰色土の旧耕作土で、土師器片が 1 点出土した。2 層は層厚が 10 ~ 15 cm の細かい砂の混じった暗褐色土で、上師器片が 1 点出土した。3 層は層厚 25 ~ 30 cm の 5 mm 前後の砂粒を多量に含む灰褐色土で、土師質土器片が 2 点出土した。4 層は層厚 15 ~ 25 cm の炭化物を少量含んでいる灰色粘質土。5 層は層厚 10 ~ 20 cm の炭化物少量を含んでいる淡灰色粘質土。6 層は層厚 15 ~ 20 cm の炭化物少量と白色ブロックが斑点状に含まれている暗灰色粘質土。7 層は層厚 40 cm まで下げたところで西側壁面が崩れて調査を終了せざるを得なかった。4 層以降は粘質土になり、遺物は出土していない。

出土遺物

出土した 4 点の土器はいずれも小片で、実測することはできなかった。図版 2 下の 1 と 2 は、古墳時代の土師器壺の一部で 1 mm 以下の砂粒を多く含んでいる。3 と 4 は、表面がかなり摩滅しているが、土師質土器の壺の一部と考えられる。



第4図 第1次調査区北壁断面図

2. 第2グリッド

第1グリッドの東側15mの位置にグリッドを設定した。バラス層下には0.9~1.38mの盛土が堆積し、盛土と1~2層との境は水平ではなく、おうとつが激しく、1~2層は上位の盛土により切り込まれ分断されている。その下は深さ2.9mまで掘り下げた。

1層は層厚が2~20cmの青灰色の旧耕作土。2層は層厚20~40cmの青灰褐色土。3層は層厚6~20cmの炭化物と砂粒を少量含む暗褐色土で、須恵器片と陶磁器片が各1点出土した。4層は層厚16~24cmの炭化物少量と白色ブロックが斑点状に含まれる褐色土で、須恵器片が1点出土した。5層は層厚2~10cmの炭化物を少量含んでいる茶褐色土で、一部下層の6層の影響をうけており時期不明の旧水田の耕作土かと思われる。6層は層厚8~30cmの炭化物少量と白色ブロックが斑点状に含まれる暗灰粘質土。7層は層厚10~54cmの灰色粘質土。8層は層厚10~36cmの淡灰色粘土で、須恵器片2点と土師器片1点が出土した。9層は層厚38cmまで下げたところで壁面崩壊の危険性があるため調査を終了せざるを得なかった。

出土遺物

遺物は全部で6点が出土した。図版3下の5~8は、古墳時代以降の須恵器で、5は高坏の坏部、6は坏の口縁部、7は壺の胴部、8は甌の胴部である。9は土師器片、10は肥前系磁器の瓶類と考えられ、外面に3本の囲線と松の染付文様が施される。江戸末期のものである。

3. 第3グリッド

旧原郷館の南側5mの位置にグリッドを設定した。バラス層下には0.94~1.34mの盛土が堆積し、西側の盛土は造成時の削平によるものか3層まで切り込まれている。その下は深さ2.7mまで掘り下げた。

1層は層厚10~20cmの青灰色土の旧耕作土。2層は層厚4~10cmの砂粒を含む青褐色土。3層は層厚8~18cmの砂粒と白灰色土をブロック状に含む褐色土。4層は層厚8~18cmの灰色粘質土。5層は層厚26~32cmの白色小ブロックを斑点状に含んでいる淡灰色粘質土。6層は層厚26~50cmの暗灰色粘質土で、土師器片と陶磁器片が各1点出土した。7層は層厚12~22cmの小砾を少し含む黒灰色粘質土で、土師器片が1点出土した。8層の青灰色粘質土は36cmまで下げたところで西・南側壁面が崩壊したため調査を終了せざるを得なかった。8層上面からは流木が数本出土した。

黒灰色粘質土が認められた7層は標高みると8.7mほどになる。この層と同様な層が昭和63年に調査を行い検出された溝状造構直上の層に認められ、標高が8.8mとほぼ同様な高さである。7層下の層も類似していることや距離的にもわずか7mしか離れていないことからこれらの層は同一層である可能性が高く、西から東へ若干の傾斜をもって堆積する層であろうと思われる。

出土遺物

出土した遺物はわずかに3点である。図版4下の11は、弥生土器か土師器片で砂粒を多く含んでいる。12は土師質土器の小片、13は備前系陶器すり鉢の破片である。

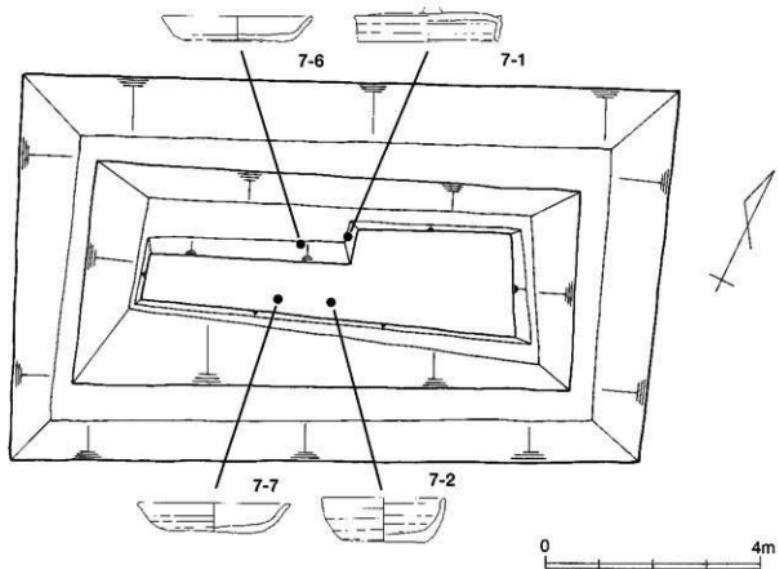
4. 第4グリッド

第3グリッドの東側12mの位置にグリッドを設定した。当初は第3グリッドの真東に第4グリッド、その南に第5グリッドを設定する予定であったが、水道管などの地下埋設物の影響で現在の位置1箇所のみの設定となった。バラス層下には0.88~1.18mの盛土が堆積している。西側の第3グリッドとほぼ同様な堆積状況であるが、第3グリッド4層の灰色粘質土の堆積がみられない。また、第3グリッドでは薄い堆積だった1~3層が第4グリッドでは厚くなり、逆に4層(第3グリッド5層)は薄くなる傾向がみられる。全体の深さは2.6mまで掘り下がることができた。

1層は層厚4~28cmの青灰色土の耕作土。2層は層厚16~28cmの砂粒を含む青褐色土で、須恵器片が1点出土した。3層は層厚36~50cmの白色ブロックを斑点状に多く含んだ淡灰色粘質土で、土師器片が4点出土した。4層は層厚10~28cmの白色ブロックを斑点状に少量含んだ暗灰色粘質土。5層は層厚6~28cmの黒灰色粘質土。6層の青灰色粘質土は50cmまで下げたところで南側壁面が崩壊してきたため調査を終了せざるを得なかった。

出土遺物

出土遺物はわずか4点である。図版5下の14は須恵器甕片、15~17は土師器の破片である。いずれも古墳時代以降の遺物である。



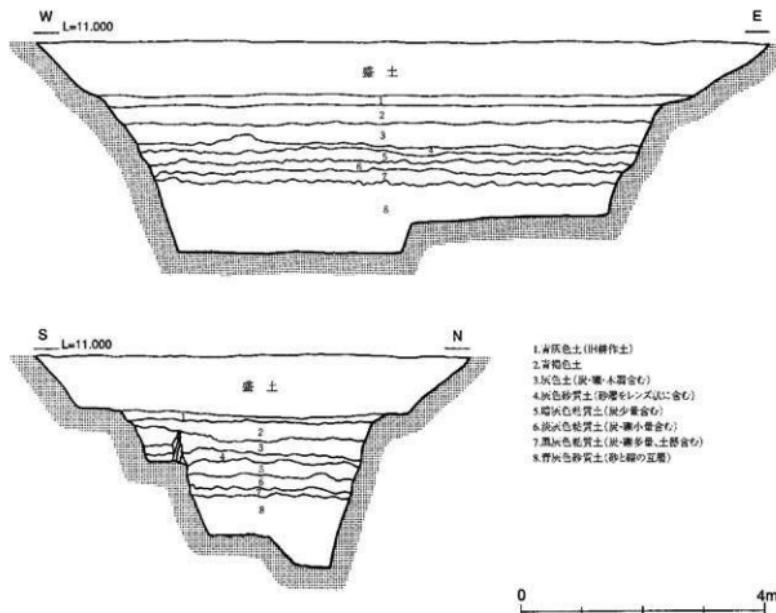
第5図 第2次調査区平面図

第2節 第2次調査の概要

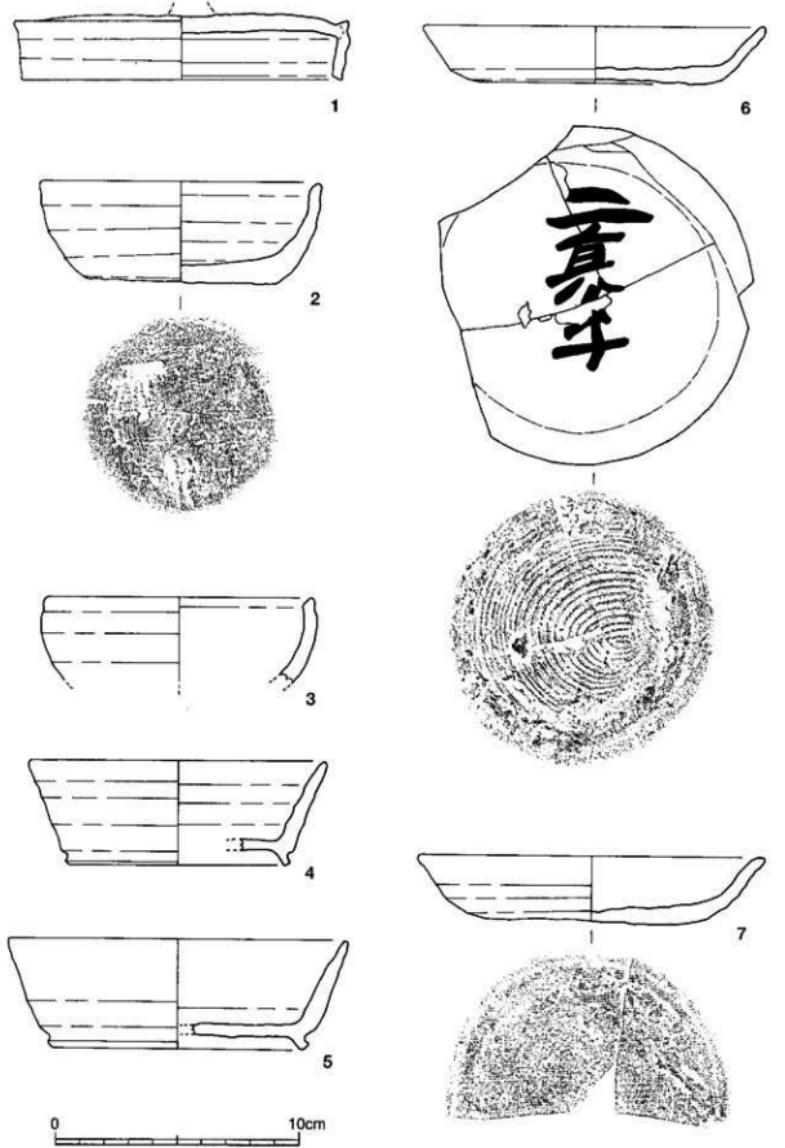
1. 調査の概要

第2次調査は旧原郷館の跡地に調査区を設けた。これは第1次の試掘調査の結果、第3及び第4グリットで昭和63年調査時の溝状遺構直上の層に相当する黒灰色粘質土が認められることや、この部分が荒神谷資料館の建物本体の一部分にあたることから調査区を設定することにした。調査区は東西12m、南北7mで、深さ3.5mまで掘り下がり、遺構を検出することはできなかった。

史跡公園整備時に盛土した土砂を約0.9m除去すると、1層は層厚15~20cmの青灰色の旧耕作土が堆積する。2層は層厚が25~30cmの青褐色土で、須恵器片2点・土師器片1点・陶器片2点が出土した。3層は層厚15~40cmの炭と礫と木片を含んだ灰色土で、須恵器片1点・陶器片2点が出土した。4層は層厚10~25cmの炭化物少量と1~3cm大の礫を含んでいて砂層がレンズ状に堆積している灰色砂質土



第6図 第2次調査区北壁・西壁断面図（上：北壁、下：西壁）



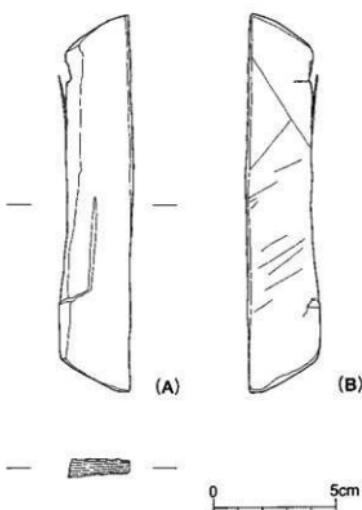
第7図 第2次調査区出土遺物実測図 1 (1:2)

で、須恵器片が1点出土した。5層は層厚10~20cmの炭化物少量を含んでいる暗灰色粘質土。6層は層厚15~20cmの炭化物と礫少量を含んでいる淡灰色粘質土で、上師器片1点が出土した。7層は層厚10~20cmの炭化物と木片を含んでいる黒灰色粘質土で、須恵器片29点・土師器片10点・木製品1点が出土した。8層の青灰色砂質土は部分的に110cm下がったが妙と礫が混じる軟弱な土質で壁面崩壊の危険性があるため調査を終了せざるを得なかった。

2. 出土遺物（第7図、第8図、表2）

出土した遺物は、須恵器片33点、土師器片12点、陶器片4点、木製品1点である。第7図の1~7は、奈良時代に属する須恵器で、1は、欠損しているが天井部につまみが付くもので、蓋に伴う蓋かと思われる。つまみの位置はろくろ回転の中心軸からはずれている。口径は13.1cmを測り、重下する口縁をもつ。焼成はややあまく、黄灰色を呈する。天井部外面に回転ヘラケズリが明瞭にみられ、内面は仕上げナデ調整が施される。2と3は坏身で、2は、口径11.5cm、器高4.1cmを測り、全体的に厚ぼったい形容をしている。底部外面に回転糸切りの後、粗い調整を施している。3は、口縁の一部が残っているにすぎず、復元口径10.8cmを測る。4と5は高台付環で、4は、口径13.8cm、底径10.2cm、器高4.5cm、5は、口径12cm、底径8.8cm、器高4.3cmを測る。口縁部は外傾して立ち上がり、高台は「ハ」の字状に取り付けられる。底部外面に回転糸切り痕が認められる。6と7は皿で、6は、口径13.9cm、器高2.15cm、7は、口径14.2cm、器高2.65cmを測る。口縁部は外傾して立ち上がり、7の端部はさらにひらく。底部外面には回転糸切り痕が認められ、胎上は密、焼成は良好で灰色を呈する。6の外面には「二真手」が墨書きされている。また内面はろくろ痕が明瞭で、器面がつるつるし墨痕も認められることから転用觀として使用されていた可能性がある。これらの須恵器は1~3、6、7が奈良時代前期頃、4、5が後期頃の製作と考えられる。その他、古墳時代後期以降の須恵器壺片や奈良時代後期頃の上師質の丹塗皿形土器や壺類の小片、近世陶器のすり鉢片がみられる。

第8図の木製品は、曲物の蓋板か底板である。円形のもので直径約15.5cm、厚さ0.5~0.7cmで、樹種はヒノキである。(B)面に細く直線的な数本のキズが認められる。



第8図 第2次調査区出土遺物実測図 2 (1:2)

第4章 まとめ

西谷遺跡はこれまでに3回の調査が行われてきた。その結果、表1にあるように、昭和59年調査では遺構は検出されなかったものの古墳時代後期～奈良時代の須恵器や土師器が若干出土、昭和63年調査では弥生時代後期後半～古墳時代前期の土器を伴う溝状遺構が検出、さらに平成6年調査では奈良～平安時代の水田跡や牛蹄跡が検出され、プラント・オバール分析によりイネが存在する可能性がわかつた。

以上のような過去の調査を踏まえ今回の調査を行ってきたのであるが、若干の遺物の出土はあったものの明確に遺構を確認することはできなかった。これは昭和59年調査結果と同様、調査地が谷の中央近くにあるため上流から幾度かの土砂流出によって住居あるいは水田などの生活・生産を行うには適さない環境にあったためではなかったかと思われる。昭和63年調査で検出された溝状遺構を含む遺構の主要部は、おそらく今回調査したところより東側に広がるのではなく西側の山寄りの方面にあるものと今のところ考えざるを得ない。

西谷遺跡の東200mの位置にある大量の青銅器が出土した荒神谷遺跡とのかかわりも注目されるところであったが、今回の調査では弥生時代の遺物等はほとんど発見することができなかった。(第9図)

わずかな出土遺物のなか目をひくのは、奈良時代を中心とした須恵器類がまとまって完形品に近いかたちで発見されたことである。短頸の壺に伴うとみられる蓋、坏身、高台が付くタイプの壺、皿形など集落遺跡で多く出土する器種構成である。なかでも第7図6の皿の底部外面に釦文「二真手」の3文字が墨書きされていることは注意しておく必要がある。本県で類例を求める、「二」は、斐川町後谷遺跡出土の墨書き「□□倉（ニカ瓦カ倉）」にもみられるが⁽²⁾、本資料の方が太くて明瞭である。「真」は、松江市出雲国府跡出土の墨書き「□（真カ）」が知られる⁽³⁾。「手」については今のところ類例がない⁽⁴⁾。

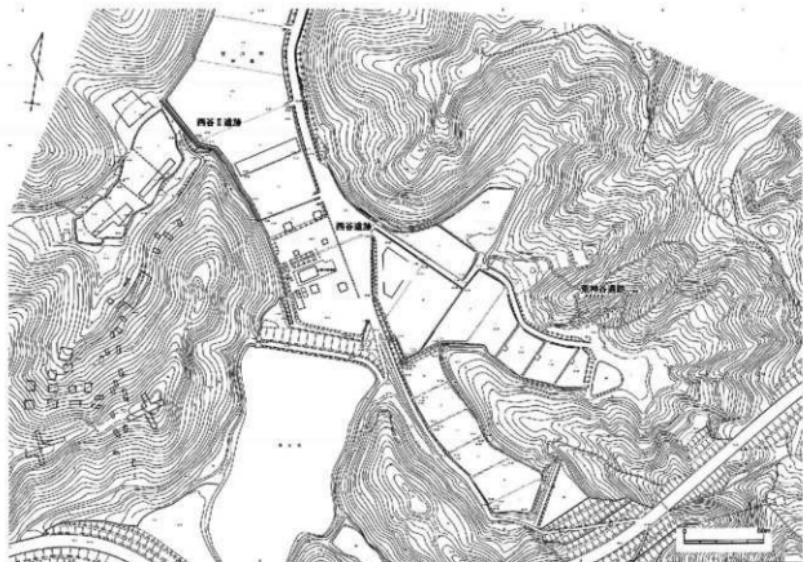
「真手」の意味について辞書をみると、①左右そろった手、両手、もう手、②「まつがい（真手番）」の略とあり、補注として「万葉集」に副助詞の「左右手」「二手」「諸手」などの字をあてた例があるとしている⁽⁵⁾。

「二真手」を上記のような意味とは別に人名の可能性はないだろうか。例えば、土器の内面は転用視として使用されていたことから碗の使用者者が自分の所有物として名前を書いておくことや、食器として使用した場合に自分専用という意味で名前を書いておく場合などが考えられる。しかし、その性格を本資料のみで把握することは難しく、ほかに地名などの可能性も想定しつつ、今後の類例を待って検討する必要があろう。

西谷遺跡は幾度かの調査によって少しずつ様子が明らかになっているが、それは断片にすぎず、遺跡はもっと大きく広がっているものと思われる。とくに荒神谷遺跡とのかかわりで注目される遺跡なので、今後計画的な調査研究を行うことによって少しでも西谷に住む古代びとの生活が解明されることを期待するものである。

註

- (1) 『島根県斐川町』遺跡分布調査報告書』 斐川町教育委員会 1992
- (2) 『後谷V遺跡』 斐川町教育委員会 1996
- (3) 『出雲国府跡発掘調査概報』 松江市教育委員会 1970
- (4) 『山陰古代出土文字資料集成』(出雲・石見・隱岐編)』 島根県古代文化センター 2003
- (5) 『日本国語大辞典 第8集』 小学館 1975



第9図 西谷遺跡と荒神谷遺跡及び西谷Ⅱ遺跡の位置

表2 遺物観察表

掉図番号	面積	寸法(cm)			胎上	焼成	調査	色調	残存度	備考
		口径	底径	器高						
第7図-1	須恵器 蓋	13.1			2mm以下の砂粒を 少量含む	やや不良	天井部: 内面:回転ヘグラズ 外側:回転ナガ(後 仕上げナダ)"	黄灰色	3/5	つまみ欠損 (変形か)
第7図-2	須恵器 环身	11.5		4.1	2mm以下の砂粒を 少量含む	良好	体部: 内外面:回転ナデ 底部: 外側:回転糸切り後 ナデ調査	灰色	4/5	
第7図-3	須恵器 环身	10.8			密	良好	体部: 内外面:回転ナデ	暗灰色	1/5	
第7図-4	須恵器 高台付环	12	8.8	4.3	密	良好	体部: 内外面:回転ナデ 底部: 外側:回転糸切り	灰色	2/5	
第7図-5	須恵器 高台付环	13.8	10.2	4.5	密	良好	体部: 内外面:回転ナデ 底部: 外側:回転糸切り	暗灰色	2/5	
第7図-6	須恵器 盖	13.9		2.15	密	良好	体部: 内外面:回転ナデ 底部: 外側:回転糸切り 内面:仕上げナデ"	灰色	4/5	外面:墨書き「二肩手」 内面:転用鏡
第7図-7	須恵器 盖	14.2		2.65	密	良好	体部: 内外面:回転ナデ 底部: 外側:回転糸切り 内面:仕上げナデ"	灰褐色	3/5	



写 真 図 版



墨書き土器（赤外写真）



調査前全景（第1次調査時）南より



調査前全景（第2次調査時）南より

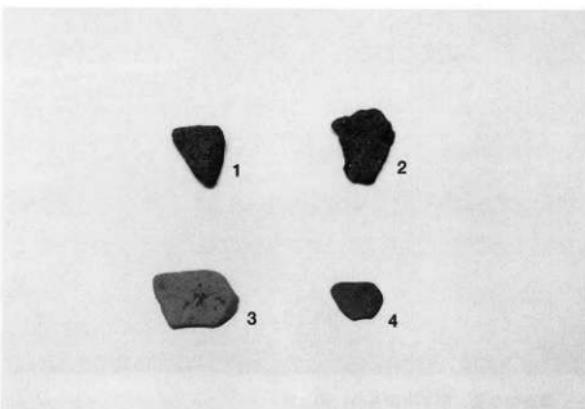
図版2



第1次調査第1グリッド
完掘状況 南より



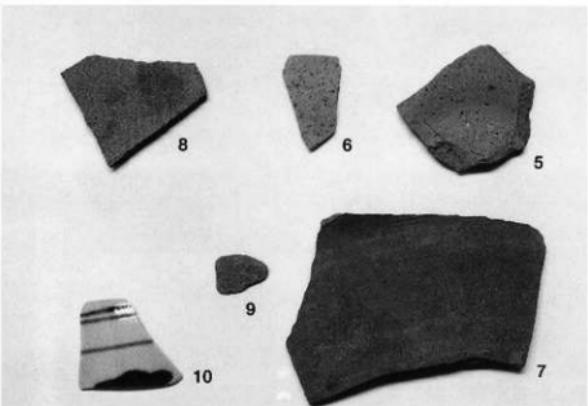
第1次調査第1グリッド
北壁



第1次調査第1グリッド
出土遺物



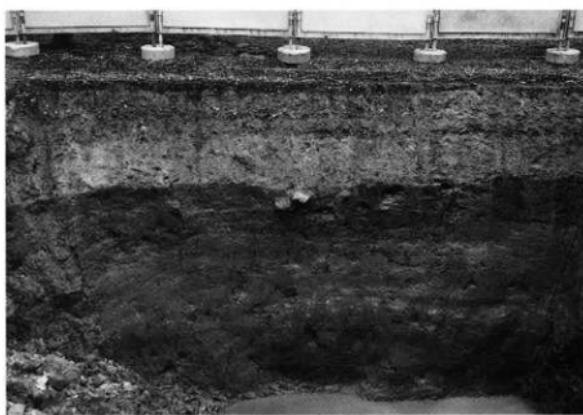
第1次調査第2グリッド
北壁



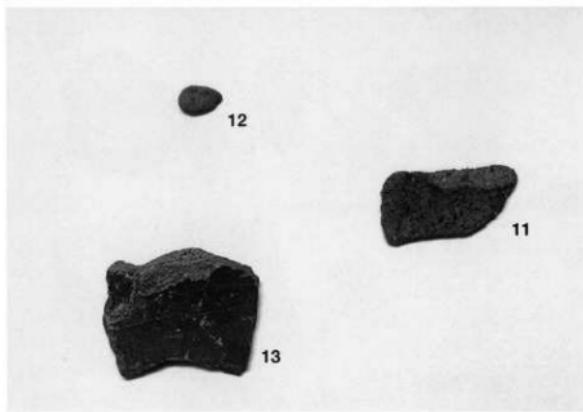
図版 4



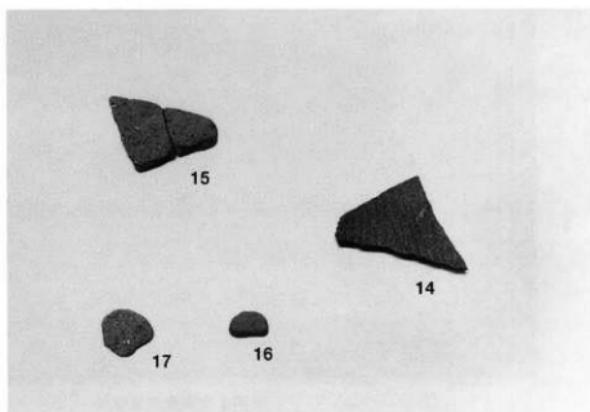
第1次調査第3グリッド
完掘状況 南より



第1次調査第3グリッド
北壁



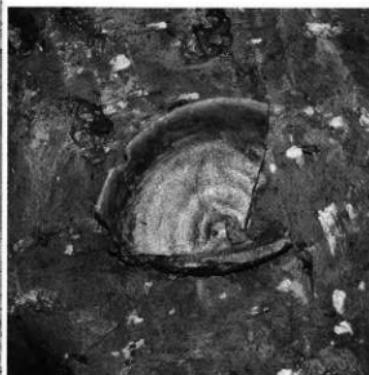
第1次調査第3グリッド
出土遺物



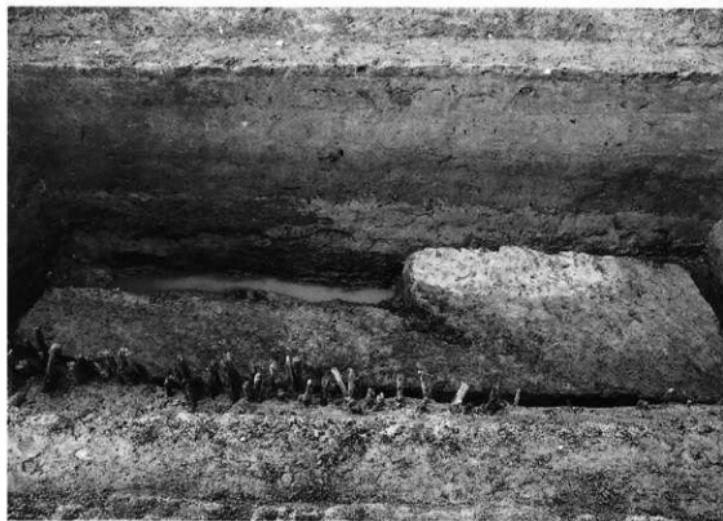
図版 6



第2次調査 完掘状況 東より



第2次調査 遺物出土状況



第2次調査 北壁



7-1



7-2



7-3



7-4



7-5



7-6



7-7



8(A)

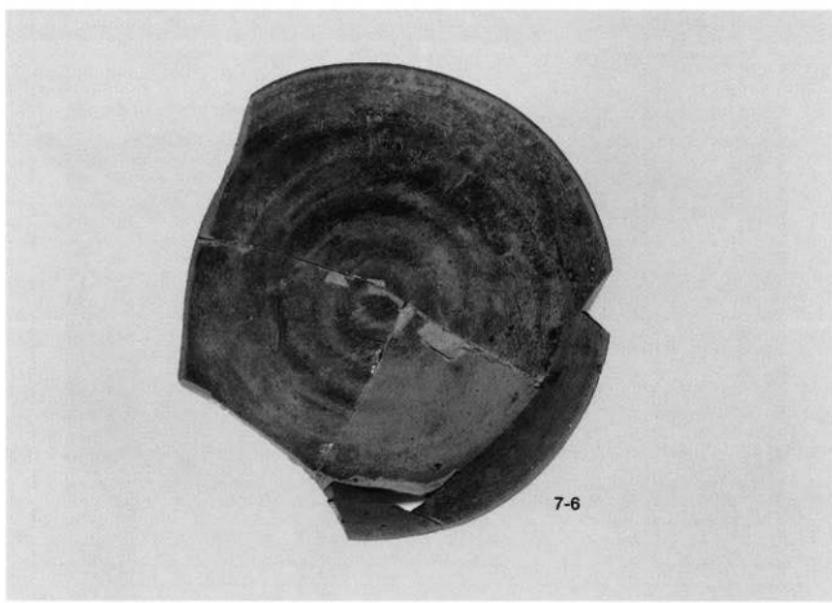


8(B)

第2次調査 出上遺物



7-6



7-6

第2次調査 墓書土器（上：外面、下：内面）

報告書抄録

ふりがな	こうじんだにしりょうかん(かしょう)けんせつにともなう さいだいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	荒神谷資料館(仮称)建設に伴う西谷遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	斐川町文化財調査報告							
シリーズ番号	第27集							
編著者名	宍道年弘 大田晴美							
発行機関	斐川町教育委員会							
所在地	〒699-0592 島根県簸川郡斐川町大字莊原町2172番地 TEL0853-73-9190							
発行年月日	平成16(2004)年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
西谷遺跡	島根県簸川郡 斐川町大字 神庭	32401	Y123	35度 22分 23秒	132度 51分 10秒	20030609 ~ 20031210	184 m ²	荒神谷資料館 (仮称) 建設予定地
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西谷遺跡	集落遺跡	奈良~平安時代		須恵器 土師器 陶磁器		墨書き土器		

斐川町文化財調査報告 第27集

荒神谷資料館(仮称)建設に伴う
西谷遺跡発掘調査報告書

2004年3月31日発行

編集・発行 斐川町教育委員会
〒699-0592
鳥根県斐川郡斐川町大字莊原町2172
TEL0853-73-9190

印刷・製本 島根印刷株式会社